漢蘭酒話　乾

[illegible]

k 48-1

F 1
カー118

慶應義塾大學醫學部圖書

漢蘭酒話巻之上

學半樓主人　著

題辭

余か友人某氏世に蘭学をもて主張せし醫家に生れて幼穉の時より其学をもて研究し慣習日久しきゆゑ蘭書をは博く渉りたりしかと漢学は絶てなき人なりけり但おのれの主とする蘭学其の学問上に於ても勤むる事は漢学を

2冊
490.4
Ka-6
1
No 2532
旧 K 48-1
慶應義塾大学医学情報センター
昭和47年6月28日
慶應義塾大學醫學部圖書
富士川文庫
662

誹謗し己より力弱き漢醫家など西洋究理の
説をもて欺き屈せしめてこれを誇り甚しきにいたりては神農
黄帝も究理を知らさる凡夫なりなと罵るを
これを聞て一夜余か許に来りて余と一盃對酌
の席に余其人に漢學を勧しに其人答ていはく
漢學は總て無用の空論のみ多くして其の
蘭家究理の發明に及ふへきもの一條もなきは
学ふに足らさるものなりと大言を吐きし傍若無人の
形色に顕しけるを余胸中に於思へらく古は孟子
と不直則道不見といましめて異端の墨者夷
之を詰りしことあれは余も此人を詰り屈
せしめて改心して後に朋友責善の良剤を
投せは此人の痼疾病平愈すへしと思ひ
即余試に其人に問ていはく我孔子ハ堯舜
を祖述し文武を憲章すと子思の中庸にも

墳典ハ三墳五典
は上古の書なり

いひ又いはく孔子これに從て墳典を討論したまふ

唐虞以下を創し玉ひし聖なりけり神農
黄帝なとはいふまでもなく皆太古の神聖なれはこそ
又それ孔子易の係辞を作りて二聖のことを
仰き奉りしなりたすまへは二聖なとは孔子の
尊崇せし程の聰明なれは業家の道理経の
ことは發明のことも多きと思ひまゐらす
故に足下漢学は我業家の道理の發明に
及ふへきこと一條もなしといへとも一時流無
の戯れなる事こそ実なる所によりいひたるものなり
故されは先に漢の神聖發明なきにしもあらす
業家にて姑く發明ともいふへし條一二ありとも
よくいはゝ西人業家發明の精密なるさ
まてに觧しかたき従をかけるに中華の医経によるへき
所なるものなれは余慨然として嘆しぬ
而して足下は寡聞固陋の人なれは蘭家
姑く發明ともし誇りし條は皆我漢の神聖

萬古以希ニ渉しまへてなきあり余一二古書の
徴證をしりて言證すへきありさして又或
本朝は上古の時より中華神聖の道を取り
天下を教化し医道は漢を學ぶ術也し邦なるに
足下王邦に生まれて王邦學術の漢學ならんや
中華の医經一巻を讀す中華神聖の古醫
經を唱る書の今此をなすこと此汗牛充
棟といへる程ならん何ぞなるはいはんす僅素問靈
樞八十一難張書十六巻のみにてこと足るへきなり一經の
（電瞭ハ視ノ名目をいからし電光の目をきらつかする事をいふなり）電瞭をなくして紫の朱を奪ひ漢を誇るは古
の神聖に對し畏れあるへきことなり孔子も
聖人を非る者を深く悪ませたまひ孝經に非
聖人者無法此大乱之道也とて不孝の罪同
じくいましめたまへり凡天下の大經大法より醫
卜百工の事に至るまて皆聖人天下後世を
憫みてたまへる工夫にあらさるはなし後世の醫

事詳に器便なるに至ると絶へて神聖剣業
垂統の功力なることのなり然るにこれを妄に
誹りなば人の子孫たるものの爵禄祖先に勝るも
しかして祖先の余徳を知らで慢りに罔れたる
べし故に然れんば思ひ事して語りなば実に
天下大乱の本なるべし是等の理足下なと
智ありて志しぬ者なきに独しからば屈して漢
学に暗きゆゑなり爾来中華聖人の書をよ

こゝに聖人を誹謗せしを深く悔ひしと
いひし其流石蘭の一学に長ずる才能
人ゆゑ頗る不解して今は漢学も率
しありて余因ておもへることの問答をかき
記して世の蘭学者に示しなば其人固我の
適痛にかかる人の薬石ともなるべく漢学も
示さば蓋漢学の古書を研究せらるべしと
おもふる一箇の老婆心より儒業の暇ここを

書に見たり、

○某氏曰、予此法一二病人を療せり、其の症水腫脹満して、こゝにおゐて漢醫療治して、小便通利の剤を施したまへども少しも験なく、予に治を乞しゆゑ、予も薬は同薬にて海葱茅根の類を用ひたれども、その効なく、又手術を施し、小腹に彼鍼を刺し、其穴に管を容れ、日々水数升をとりたまへは、五六日にして腫退き、水病悉く除き、病平癒せり、然し其人宿命なるにや、そのゝち程なく後病再発して殞せり、死生は司命の主る所、医者のなすべきにあらず、されども鈹鍼を刺し管を容れ、水を採取るの法は、滞水には絶て善きことにて、薬剤の如く奏功せし術なりといふ、余窃に曰、足下は按見固陋なる人の説、水腫の病に鍼を刺、管を容れ水を取るは、滞水にては

徒痳病にして古に神聖なる術を行ひ来りし
ことのなりし術にて其術は格別の名誉ありて今は百
発百中十全の功を得ること縦令さいは徒痳
病まて鍼管を用ゐ人手に疵なきものに至人の脈宗
術なれ虚実を深く視得たるの能なきまでは
術を施し病は除てとも後自ら虚脱して
死することあらんよしや死せざるも誠の偶中
なれは其は百発百中し難く其人々誤殺也
は百人を活せしとも其罪は償ひかたきことなるに
殊に世に薄醫ども怠りて行ひきたりては自然此術
世に絶但醫書に在とも称して人の知らざるに至
まで凡機変の術は其人存して此術行ハる
べきことなれハ素問にも非其人勿教とのたまふ
術をよみのまゝ枝の跡抔を知らずして神醫
なりとては行ひがたき術を施し僥倖を求めは
病をもむさぼるは仁人君子の為さゞる所なりさて

筩ハ但管竹のことく断て筩とすることなり

悗ハ何ぞの乱ぬけして廃忘すること

又徒疢病といふは但水の氣のこりて風寒を受けるの腫なり靈枢四時氣篇曰徒水（疢）先取環谷下三寸（環谷といふ穴ハ何穴なるやいまたつまひらかにせす）以鈹鍼〻之已刺而筩之而内之入而復之以尽其疢必堅来緩則煩悗来急則安静間日而一刺之疢尽則止飲閉薬方刺之時徒飲之方飲無食方食無飲無食他食百三十五日とは是は豈漢の神聖手術に似たるものにして稱り

蘭家妙く発明せりといふべけんや

上瞪　瞪とは目をうへに見することなり

○某氏又曰我蘭家人の神明は頭脳に在と説なり何に依て人往事を追念稽考を思慮するに必目を閉て上瞪してことを憶索するハ即ち神明を脳に凝すゆゑなり物を記憶することは記するゆゑ小兒の時は脳髄いまだ満ず老人は脳髄漸く虚するゆゑ記憶壮年の人に及ず健忘するゆゑなり此事中てことを

總じては我蘭家の説を主として漢家の人の
神脉心藏に係る所の説妄誕なる事を知らす
よりて余笑て曰足下の説は一を知て二を
知らさるの論なり足下よりて世学文盲の
漢醫説をのみ聞中藏神聖の言を知らさる
ゆゑなり如此無知なりしことを知るへし支那の医書
近世に至ては蘭説のことく神脉は但頭に
あることを知りしかれとも汪訒（ジン）庵主恵源
なとも如此説を立るよし多紀氏の医賸に見えたり
然しなから皆岐黄神聖の説き垂れしは意に逆せ
さるゆゑ如此偏説を生し伝ふるなりされと神
聖の説き玉ふ所不知して遂致するに凡（ツ）人の神脉は
心藏に生まれて頭脳に守ることなり故に素
問霊蘭秘典論篇に心者君主之官神明出
焉と云へり又東医宝鑑といへる書に注すに黄帝内
経を引て天谷元神守之といへり（天谷ハ頭脳の一名なり）

醫学原始といふ書に黄庭内景をいはく脳為
泥丸宮元神居焉とあるにて知るへし蓋し
人の神明は譬は火のごとし火は薪か炭か
何にてもその著されは燃なするの能をはると
のなり神明は人身中の血液に寓されは燃
行しかることのなり夫ゆゑ一身血液流通す
所に神明行さるはなし血液流通せさる処なし
神明行事なきことなり薄皮爪髪其外血液
流通せさる所ゆゑ痛痒寒熱を覚えることも神明
行されさる所なれはなり其他血液流通する処には神
明行されさる事なきゆゑ何にても傷あれは悉く痛
痒寒熱を覚えさる所なきなりさて其血液といふ
ものは元来飲食より出るものなれは神明もまた
飲食より生するものと知るへし素問八生神明論に
血気者人之神なりと云へり霊枢衛営生会篇
に営衛精気也血者神気也素問脉要精微論

（頭の傾ハ目てみる所遠くなり深くなりて正しくなきゆゑに心もそれて見るゆゑ）

頭者精明之府、頭傾視深精神将奪矣、故心者君主之官、神明出焉とあるものハ誠に確乎たる古の説といふべし、然るに人体ハ耳目口鼻は皆首に聚り最高頭にして知覚最上の所なれハ神明は頭脳に舎りて一身を守るになるや明かなり、然則神明ハ頭脳に於てと謂て

（関係ハかゝはりかゝりの事也）

心蔵に関係なきにあらず、偏僻の見なるべきなり、実に神聖の説を明らかにせしハ神明の本末

終に渙然氷釈すべきなり、是漢の跡に似く而て密蘭は密に似たる而て跡なりし如なり

○某氏又曰、漢医方にて發汗の薬は桂枝麻黄を主とすること、我蘭家吐根發表の捷なるは及ず吐根を本吐薬なりとも、能く用ゆるは發表の薬になりし、是理は漢家なるのいまた發汗なき処なり、吐根發表の剤とし吐根主とすましてかのは一品味をかへ蔽後してふるく燈

湯を飲めは汗忽以て邪を除く事其功甚
速なりと語れり余失てつよく吐薬は猥く用
ゆれは発表の薬となり究理は我神聖は
よく発明し玉ふものなり金匱痓湿暍（エツ）篇に

暍ハ暑熱にあて
られてしぬるを云
漢書に元封四年
夏大に旱す民多
暍死すとあり

太陽中暍身熱疼重而脉微弱此以夏月
傷冷水々行皮中所致也一物瓜蒂湯主之
とあれは是瓜蒂は元来散服すれは吐薬な
れとも煎湯にして薬気を弱くして用ひは
皮膚間の暍熱水気を発表する方剤なり
神聖発明の方法は疫邪は多く実熱を
温し且中暍に比すれは進侵緩なるゆゑ
されハ桂麻なと温剤にて柔に発表し中暍
は湿熱入て深く且毒を兼るゆゑ瓜
蒂苦寒散水の猛剤にて発表す就中に蛮
家には疫邪中暍の差別なく猥しく吐根
発表を用ゆれは汗さへ多く速に出ては良剤

と見ゆるとなへたり跡もしめへしさして又発汗の法は神聖の至て怯しきものにていのちとなるゆゑはみだりに行ては汗身に在く津液少くなきは此身の分量より一滴多く漏してと身躰同じからぬ所は不足のことてありける故桂枝鮮肌和柔の薬にて発表せしむる時も

熱稀粥はあつき
うすのかゆ稀は
少之ゆるきさらし
かゆなり
収斂強力とは
しめ縮る力の
はよきことなり

熱稀粥にて薬力を助け麻黄収斂強力の剤にて発表せしむる時は津液を強く絞らんずを恐れて熱稀粥の力を假らず五苓散などの散薬にて発表する時は熱稀粥にては力弱きゆゑ多く煖水を飲しめて発表する法なりとは至極精細なる行届きまでのことなり

速に汗させんとあせりつきては良剤なりともかへては医術究理の跡なるなり總く治療は妙は存するなることのみにして発表の時汗出る事不足なれは邪気除けず又発汗するにみな至りては邪気除く

となり津液虚乏して経る経絡の病を引出す
ことなり然るを医者は表に心付ず病家は表を
知らずして汗を出しければ病進みては能く
病家は重き病なりとのみ心得て初医者人の
強弱脈の虚実を問はで発汗させてなやまし崇を
は夢にも心付ざるなり又傷寒論桂枝湯
の方條に発汗の方を煩しく丁寧反覆し
て悪寒あらは且又諸條に発汗の誤治を戒め
給ふこと誠に深切著明なり然神聖の書
を讀て熟して深く神聖探賾の旨を
得べし（探賾ハ易経の繋辞伝の語也賾ハ深遠の意也深く隠れたるを探り求むるを探賾といふなり）

○某氏又曰我当家の諸家に勝まさりて委しきは
内景にしくはなし然るを漢家人の内景に
委しきを嫉みて己の踈糲を掩んとして人の屍
躰を解剖して実物に渉り試るを妄に中
義聖人の仁道を辞に假りて不仁の事なり

と謂ては大なる謬なるかな如何となれハ假し
蠻より解剖書渡来するとも唐土書籍に藏
府経絡を説に至るまて詳なる上の謬なるの実物
に據り試されハ信用し難かるへきなり且又
刑餘の屍躰を解て世界人の生躰を治
療し其病源病根を学となすは何の不仁
なる事か有んやいたましき哉余勃然変色
曰悪是何言也人躰の内景は聖人の聡明
をもても知かたく量度して知るへきにあらす
何となれは先哲も初めに見ることを得す屍躰を解剖
しあらはし蔵府経絡井谷谿輸陰陽會通
の理を致へし此を書に筆して以て天下に伝世す
伝へ人に解剖を試る不仁なる事を行はす
して但深く其書に就て其理を究るときは
実物を試ることなくとも自ら治療の功を得ら
るへし然るを初めに著述なる霊枢経水篇

大医尚方と巧屠とをして其の皮肉を剥て脉臓を度り竹筳をもて経脈を導き大終始を察せしむる也

に八尺之士皮肉在此外可度量切循而得之其死可解剖而視之とのたまへバこれ人の神聖解剖し玉ひしことあるそ御なり又漢書王莽傳に翟義黨王孫慶捕得莽使大医尚方與巧屠共刳剥之量度五藏以竹筳導其脉知所終始云可以治病也尤これハ王莽剥者不仁の人なれハ聖人の旨にあらされ医経に能く医術を求め使すして刑屍を解て治病の助をほどこさんとおもひたる神聖其迹を後世に伝へ玉ふて人の解剖を試むる不仁のことを行ずして但深く書籍読くも理を究めては実物に依りなさぬ因循に治療の助を得らるへしとの聖意に成りし致方なり萬古人としてなすまじきことなりと人ゝ解剖して内景知るへしとしてことなし委曲精細に内景図書を編集せる事は乃ち又要

なり丈夫の業として世に伝へ我
本朝近世に流行しきては此書を見（看）て其意を
通せされは人屍を解剖せしに実物を見し
ことなりとしも意なるへし丈夫の書に載たるは
真偽正誤慥ならしめて人屍を解て学
ん事は恐くは古人業を作りし旨に叶
ふへきなり且何事にても如此深く疑て
実物に当て見されは信し難しとなさは

年々伊勢の国より暦を天下中に配分せしむ
暦に四時気候の遍は算日月晦食の算差ひ
何んにも知らへてのこさすとて暦算に当りてこそ頼て
信し用ゐ来しのことなれは人力日亦不足と
いへるのみにて実に是率天下路也といふへし
道なるへし故に内景は知らさるへからさることなり
なれとも流し至極精細をきはめても撥治
療するは益何ほとの事かあらんとて内景今に此

人力日亦不足とは人の勤ハ毎日にたしおてゆくも仕直せらるゝ程の事に天下に不足なるといふ事なり

是率天下路也とは孟子滕文公下篇にある云みな天下中の人を労せしめて道路に奔走してかけまはり休むことのなきことをいふ

こゝく委に至りける以前よりも別に明師哲匠
ありとも有りのみす徳く天学ありけるにもあらねく
まそつましくハ日食月食を預め算定する
ことなかりしに唐の世より以来委く算定あ
りしかりに奇りけるに天文ハ四時の気候
を定め寒暖をわかち民時に授くるまでのみは
用なきことのそれハ其簡要の外堯舜の世に
定めさせたまひて尚書堯典に朞三百有六
旬有六日以閏月定四時成歳とありけるは
二十八宿を見て四時気候の寒暖を定め
ありて日中星鳥以殷仲春日永星火
以正仲夏宵中星虚以殷仲秋日短星
昴以正仲冬とありと見えて民時を授くるなるは
遺漏なきことなりけり其他の御事は擧にたえず
よて弁置りしことなりしかば是孟子
に智者無不知也當務之為急堯舜之知

而不徧物急先務也とは此之謂なるべし凡夫の究理なきには末務を先にし要務を後にするもの多ければなり要務とは遺漏なく末事をは弃置せらるゝは実に聴明叡知一視洞徹の神聖たる所以なるべし夫ゆゑ日食月食の算定に至るまで別に費功人は其益なきものには甚しく係らぬものにおいて人に警戒の一助ともなりたるなり夫等深く

攷へらんとせは聴明叡知の神聖に解剖したまはゞ死物を見て生物機活の理まで悟りたまふべけれとも凡夫は肉景など実見せしとも只蔵府経絡の形状を見定ゆるのみにして図書を見（看）て其理を知ることあたはさるなるのみつきあり然らは解剖は要するに世用の事なるへし夫漢醫肉景を知らんと欲せは素靈の古書を要して読て知へく蘭医肉景をも知らんと欲せは西洋の肉景圖書

を見て究むつきこともありさて又刑餘の屍躰
を解て其罪の生死を断ち不仁なることなき
との言は大なる誤なり如何となれは丈刑も
罪の大小に従ひ磔獄門斬首に処せらるゝ
既に死刑に処せらるゝ上ては其屍は無罪同然
なるべきに又其屍躰を解剖して齏粉の如く
なせしは是刑を重するに近して仁人君子の忍ひ
所不忍なりかし惻隠のこゝろに不忍る刑人
の祟を恐るゝの何ましにや解剖の後齏粉の
躰を聚め葬式を営み僧に読経をなさしめ石碑
を建て刑人を敬ふなれは既に人の首をきり
痛ていまこゝまでを撫て循するに因あるへし
寔に乗る悪を重する謂〆しさすれは漢家
解剖をなす不仁の道て謗らるゝは豈只人の長を
嫉己の短を掩ふのみならんや抑道何るなり
○葉氏又曰孕胎の説漢説には皆以為らく妊娠十

月子頭上に向て将に生んとする時身を轉して下る
ものとせり我
朝の賀川玄悦其説の傳謬誣真を悟り始て背面
倒首の説を唱出せり賀川氏此説の究理は蓋し
按腹して其実を得るのみにて徒に議論を逞
くするものに比にはまさるなり志かれとも猶いまた究
理を得す我家にて此説にては受胎の時子頭
上向形躰備るに随て倒首に至る草木の実も
初は上向肥大に至るに随ひて下に垂向する自
然の理なりと説り此説にて論議ありしめて定
まらんとしける余笑ていはく足下其説は
蘭人の始て発明せしと思ひて誇らしむるか中
華にては宋の世に既に其説を唱へたる人あり
史をも志らすして但家説を究理に巧なりと
のみおもへるは誠に井蛙の見といふへし宋沈括
か夢溪随筆といへる書に凡草木百穀之実

顛ハ稲や麦なとのある穂先の末のことなり

皆倒生首係于幹其上抵于顛（テイ）処反是根

人與鳥獣生胎亦首衝向下とあり又朝鮮

の李退溪か啓蒙傳疑といふ書にも又この説

を載たり是草木を譬にとりて漸く倒首する

脗合ハ二つのもの事相同じきを脗合といふ

脗ハ上唇と下唇とぬ合する如くもとちかく此名事の寸分不〔違〕なるを脗合といふ字彙にハ唇の辺を吻といへる

の説脗合符同なれとは豈蘭人始て発明せる

といはんやさて又子躰漸く倒首するの説

は理屈にかけし至極おもしろく覚ゆれとも手足

腰肉并天樞まて人の能審にすへきことにあらし

されハ実に無用の究理なるへし知之亦無益

不知亦無損これらハ更に往古神聖ハ説

玉はさる所にて更に論しこまかに説をなさハ

俑とハ葬式の时死人の従者の代りに用る木人形のこと昔ハ藁人形を用ゆ藁人形を芻霊といふ中世より木人形を用ゆ是を俑といふ木人形ハ殆人に似たる故に不仁の一端なり

孟子梁の恵王上篇に孔夫子の言をのせて仲尼曰始作俑者其無後乎為其象人而用之也とあり

君子於其所不知蓋闕如すれ聖誡に背て

返しハ却て解体不仁の俑を作ん深く恐

るへきことなり

俑を作て似りあやし人の子孫の絶なんとハ云らぬことなれは不仁なるまことになりたる病を語にたとへしもなるへし

○某氏又曰我蘭家究理の説にて瘰癧ハ常

疝の下地なりと説ては実に和漢未発の説

にて実物に攷看するに瘰癧の毒気胸中に注ぐものは悉く労瘵にて終るなり卓越の究理と謂べしと信ずるなり余案て曰圓而連者瘰癧といひ不連而長者馬刀瘻といひ侠頸而生者を馬刀侠纓といひ其潰れて破れたるものを鼠瘻といひ其実は一物なり霊枢経脉篇に馬刀侠纓は少陽所生病なりと説き玉へり足少陽膽經は頸を循れる經絡なり手少陽三焦經は心包に散絡する経絡なり夫故足少陽鬱結して頸に瘰癧の類を生ずるは其毒流れて經を傳へ心包に入り瘵労を成すものなる故霊枢癰疽篇に其癰堅而不潰者為馬刀侠纓急治之と説き玉へり又手少陽鬱結するときは病心包絡より始り労瘵を為して其経を傳へ病頸に発して瘰癧の類を為し終に極めて難治に至るなる故金匱血痺虚

（痺ハシビレル事ニテ冷湿カ根本ニテ気カ滞ニテ気ノ分リ出ル病ナリ俠ハ傍之並之但シ背ニソウテ行ヿ）

労病篇ニ人年五六十其病脉大者痺俠背行若腸鳴馬刀俠纓者皆為労得之ト従医王アリ蘭よりて瘰癧を労瘵の下地とのこさる偖く労瘵ハ瘰癧の下地なるを知らさるは偏見といふへし瘰癧労瘵両病表裡するの理にて中華和蘭古以来発明して定まる事労瘵に於ては発明なりと是へしハ寡聞固陋といふへきなり

○某氏又曰我先比一医家を訪ひしに彼家漢の素問を講しけるに其條をよみけるに昔在黄帝生而神霊弱而能言幼而徇齊長而敦敏成而登天とありされハ我蘭家の書ニハ如斯奇怪なる事ハ一條もなきことなるに漢家の聖経なりとて珍重する書物は妄誕伝し難きことを載られたるものなりとおもひ是我蘭家を非とし漢を譏る人もありけり先生は究角

素霊を伝へし岐黄を崇めたりし素問彼條
なしの伝しありや余曰古人の言に禍起二於
小人一罪帰二於君子一といひて誤始二於解
者一罪帰二於聖人一と謂べきこともあり素問彼條
なれは注者皆解を得て終に聖経を無是
烏有之説を載たるものなりとおもはしむるに
至りぬ黄帝生而神霊とは易係辞に不可
測之謂神といひて黄帝ハ性自然不可思
議の才徳あらせられしといふを生而神異
といひしこともあり生れながら赤子の時不思
議の事ありしそのよしはいひたるなり
弱而能言とは礼記曲礼篇に十年曰幼二十
曰弱といへりさすれは此条も幼而能言弱而
徇齊といふべきに弱ト幼トを混せしは素問
礼記傳を知らさるなり儒家此書なとも
訓詁如此異同するものありといへるなり詩経

周南巻耳篇に陟彼崔嵬我馬虺隤陟彼砠矣我馬瘏矣といへる処の毛傳に崔嵬土山之戴石者砠石山戴土者と解せり爾雅には崔嵬石山戴土者砠土山之戴石者といへり毛傳と爾雅とはいひても訓詁惿なる書なるに如是異同するは各所傳の異なる孰か是孰か非なるや今不可知ことなり弱幼も曲礼と先後異にしても素問の意にしては弱ハ十歳の年幼ハ二十歳の年とはおぼつかなきなり史記注に潘岳哀弱子篇を引て其子未七旬曰弱といへり呉崑が素問注に弱始生百日之称といひしても弱字に如此訓いひては古書にたしかなる徴證なければ固より信しがたく且人生まれて七十日百日まで言語せしと解せは誠に怪誕なるべし能言とは孟子に禹聞善言則拝といへる善言ハ同義なり古人能と善

と同義に用ゆる例なりといへり、荀子勸学篇、非能水也、唐の楊倞注に能善也といへり、漢書百官公卿表に、柔遠能迩、唐顔師古注能善也といへり、其他左傳成公十一年、蘇氏即狄、又不能於狄、劉向新序、嘻吾兩君之不相能也、又説苑譬如水火之不相能然といへる能字も皆善字の義に用ゆるなり、黄帝十歳なる小児の時既に天下を治る善言佳論を述させ玉ふといひしなるを、弱而能言といへることなり、幼而徇齊とは徇齊の二字は皆疾速の義にて、黄帝二十歳の頃には聰明にて知慧疾速なりしゆゑかくしてあるを、幼而徇齊といひしことなり、長而敦敏とは爾雅に、敦勉也といへり、中庸人道敏政といへる鄭玄注、敏猶勉也といへり、黄帝聰明なる上長壯の年に学問勉強し玉ひて、岐伯伯高

（匕目乚りの字は匕は化の字也 目は目乚りは人 気の字にて雲気 のるもとをよりてたゞちは 目は人の精神の霊をあらはして人の 体の大切なるものなる人の 形をあらはして目といふものを 作りてものしるべし 形をなすにまことなるみ なるなり乚りは雲気のなる天の 雲気に載るて 容乚りユテ形を 乗りて天に登るといふ字を 書しか六書正譌に人変気以 生目最先神之所 所聚無非実也 故从目从匕化也从乚り气之状 也といへり）

なすこと研究させしめいふとなりき長而敦敏と
いひしをとのあやまりて成而登天とは成は先成
人よりありたるいふものをきりて登天としては
真人となりしものを天にいふなる字を天に
のぼりたることはいふに許叔重說
文に真仙人変形而登天也从匕从目从乚八
所以乘載之といへり是真字登天の義
文字を寓言して真德を全して真

（囫圇はめくこともなきなん）

人となり玉ひしのちに登天とありしを書紀の
なるものゝあやまり古人上古のことを記するに多く寓
言をもて記したるに女媧氏煉五色石断鼇
足のたぐひ多く漢代以来儒者文句の徒
囫圇（コツリン）呑棗に解せしかば意義不通怪說
蜂起して道に重理を化物語のやうなる
ものになりしよりては至れし皆注者の誤
解よりおこる故に余謂らく誤始於注者罪

帰於聖人と定まる要経とは虚偽謬誤なきものと知るべし

○某氏又曰先生の言を以て始て中華神聖の究理古書を解すれは工夫と知まりて至る今よりは敵をも更へ漢学なし人留へきなりさて漢医は傷寒中風温病の治療且其病因なれとも第一に議論せらるるは丈に齊き症病なる一種の病何より彼の病因は何なる邪先年誠従ひしものや余答曰上古神聖の従て天より八風とりて宗何りて八方より来るとなり北方より来るを大剛風と名つく其気人に傷るは督脈経に中りて人をして角弓反張せしむるになり督脈経は尻長強穴より始り背の脊骨を歴て口の齦交に終る経絡なり丈故角弓反張の気何る病は寒戦咬牙を生ずることなり骨は腎蔵の主るとの故寒戦を發し督脈の

齦ハ歯ノ根ノ肉ノコト歯茎ノ事ナリ

寒戦ハフルイワナヽクナリ

経は齦を咬牙をかみする自然の節なり又
出るに金匱痙湿暍篇に剛痙爲病胸満口噤
（齘ハ歯相切也と注す歯をくひしめ歯ぎりすることなり）臥不著席脚攣急必齘歯とあるさて痙病
は大剛風に觸れる病なりと余説をもてる
證拠と靈枢九宮八風篇風從北方来名
曰大剛風其傷人也内舎於腎外在骨
與肩背之膂筋其気主爲寒也との旨あり
是其確徴なるべしさて又金匱に瘡家雖身
疼痛不可發汗汗出則痓なるとあるは是
（痓ハ角弓反張する病のことゆゑにソリとよむ）類痓の病にて真の痓にてはなきなり

○某氏又曰我蘭家にては蒸發の気といふを
第一に論せり漢家にても其説ありや余答曰蘭
家にて蒸發の気と呼ぶものは上古神聖或ハ衛気
或ハ上気或ハ穀気と称し玉へりさてその神聖
の説にては穀食の気胃府より肺蔵に傳化し
肺蔵より其精なる気を一身の脈絡中に流布す

是を営気となつく故に霊枢営気篇に営気之道内穀爲宝穀入於胃乃傳之於肺流溢於内布散於外精專者行於経隧常営無已終而復始是謂天地之紀とのたまへり又穀気の祖なるによりて肺蔵より皮膚間に布散して是を衛気となつく故に霊枢営衛生会篇に営在脉中衛在脉外傷寒論には営行脉中衛行脉外と宣へり

衛気は常に一身のおもてを行て腠理を固め精気津液の漏さる守をなし又は気を汗空の肉より上をしらくひらき閉る邪気を拂除くの用をなすよりて是を衛気となつく霊枢終始篇に人迎一盛瀉足少陽而補足厥陰二瀉一補日一取之必切而驗之踈取之上気和乃止とあるは上気は即営衛に所謂蒸（発）気也又同篇に凡刺之属三刺至穀気邪辟

妄合陰陽易居逆順相反沉浮異如四時
不得稽留淫泆須鍼而去とのまへ穀気又
蒸発と氣の事なり又蒸発氣閉塞の病と
説あり又衛何り靈枢失常篇に衛氣之留於
腹中搐積不行苑蘊不得常所使人

肢ハ人の手あしのこと脇ハ両方の腋の下のこと

肢脇胃中満喘呼逆息者何以去之伯高
曰其氣積於胸中者上取之積於腹中
者下取之上下皆満者傍取之とのたまへり

審詳ハこまかくつまびらかなるなり

此数條にて蒸発氣の論ハ審詳昭明なる
べきなり

○某氏又問曰儒經に医不三世不服其薬と
いふ語何のよし是カ輩解し得ざることおほと
をこゑあり中華の岐伯伯高雷公ハ邈たり
後世ハ扁鵲仲景ハ皆医術精妙にして
書をも著し言をたてられし人なれどもされども
其父子に傳て精妙に至りしを不知周より

医の巧拙は父子相承此世数に係るといふ何ぞや
しきりなり何として聖経にはかくやまうしてある
や余答曰足下此不疑理何ぞ既に中華の大
儒名医といへとも此語をは明解し兼ていろいろ此
等説をも唱へられけり旧説とも皆父子相承のこと
と説かれしも正義とては不通なる故宋景濂
といへる人も礼記孔頴達か正義に載たる一説に
本つきて古之医師必通於三世之書三世者

袪ハ却之散也
袪疾とは病を
散しさるといふ
ことなり

一曰鍼灸二曰神農本草三曰素問脈経
脈経所以察證本草所以辨藥鍼灸所
以袪疾非是三者不足以言医といふ説なり
然れとも此説も又不通なるなり何ぞ三世の書
をも不読といふ事あらん但不三世と書ては意
義事あるへし且此脈経といふものは素問
示従容論篇に雷公曰臣請誦脈經上下
篇甚衆多矣といへとも何世此書なるを知す

鍼灸の書は即今の霊枢経なりと称し素問と霊枢とは皆岐黄問對の書なれハ分て二世の書とは為しかたきなり存するときは三世の称を付かたし尤此説に従ハ又不要なるへし其他医学に正傳なり医不㆓三世㆒不㆑服㆓其藥㆒條の疑問あれとも別に明解なし近年一医家一説を立て三世は即三歳のことなり礼記曲礼に去国三世とある如の釈文に世歳也方物以㆑歳為㆑世といへる世字と同し史記倉公傳に事㆑之三年所即嘗已為㆑人治といへり千金方には世有㆓愚者㆒讀㆓方書㆒三年便謂天下無㆓病可㆑治㆒及㆑治病三年乃知天下無㆓方可㆑用㆒といへるにても知るへし今の医亦讀書三年然後嘗已為㆑人治㆑病也苟も讀書三年ならされは方書不㆑精病を診するも疎なるへし医不㆓三世㆒不㆑服㆓其藥㆒と宣ひしことあり余謂

此説も亦不可無何ぞ經文に但医不三世と
めさゞれば讀書三年の事なるの施術三
年の事なるか事師三年のことなるか分明
ならずしかのみならず且文医道なることなれば学の
精粗と術の巧拙とを同へきるに讀書の年数
を問ふは元來僻事なるべし人に知愚才不
才の別あれは讀書三年にて克すれは解義
精細なる人もあり又終身讀書して意義
不通なる人もあれば讀書の年数にて医道の良
拙を定め難きなり余按するに世字生字を
古人通用せり列子天瑞篇に皮膚爪髮
隨レ世隨落すといふ文あり張湛注世与レ生
同とあり医不二三世一不レ服二其藥一といふ人の
命を救ふ生れ附たる医にあらねば藥なしては
服さぬ事といふ意なり曲礼に此二句は
君有レ病飲レ藥臣先嘗レ之親有レ疾飲レ藥子

先輩之とりて謂ふは、従ふし稀なれとは、某父の庭訓あれは能くに体して云ふまて稀なる生活の道の行ふ医者ましくしては剰も百年のなるよりてここを従きおりしこのなりかくおもてく解せは、益聾の疑ひあるへきことなり。

○某氏又問曰、俗に飲食するは服すといはすして薬を服すに限りて服すと、漢医家にいひ唱ふ、如何なる事や、余答曰、素問遺篇刺法論、小金丹の方後に、冰水下一丸、和気噤之、服十粒、無疫干也とあり、医書にて服の字用ひたるはこゝにはじまりし如くみえたり、されとも注家に生気と解し辞す、丹方彙編といふ書に、古云服藥而不言喫藥者、蓋謂人能信服其藥、始效耳と説り、笠翁か壽世青方といふ書の跋文に、夫病者之于藥、不曰飲、不曰食、而曰服、服者是欲人中心誠服、猶七十子之于孔子也と解せるは、

ん移なき薬は效なきことのゆゑ薬を飲は誠に
ん移して用ゆへしとし戒を寫して移す
ましきことのとんなるなり

○某氏より問ていはく儒書を読て医籍を
読の助何には勿論のことなるへし先生は儒に
て医籍を読まれしに医籍にて儒書の徴證
とする助何ことのあるや余答ていはく素問霊
枢の類は上古神聖の言を載たる書なれは

佳言妙論も勿論の事儒經に詳ならさる
文字訓詁なとも素霊にて徴證すへきこと多
あるなり先一二をあくれは孟子離婁篇に
今也小国師大国而恥受命焉是猶弟
子而恥受教於先師也とあるは文あり
さて此先師の字は先子先人の例に依れは
死したる師のことゝするを先なる師道を
先師と称せしは他經に絶てなし夫ゆゑ

京師の梓肆長博が論孟攷文といふ書に
先生と改しより夫は素問を讀さるゆゑなる
霊樞に黄帝岐伯直問答の中に黄帝は岐
伯を先師と呼まへしこと数條ありてこそ先
師は先なる師匠を稱する辭なる事明なり
霊樞百病始生篇に黄帝曰余固不能
數故問先師願卒聞其説又師傳篇に
黄帝曰余聞先師有所心藏云々と

作云はさして
いふまでも

宣ふはこれ皆先師と黄帝眼前にある
岐伯を作言したりしは先師と先哲師道
のことなる確徴なり又荀子勧学篇に無冥
冥之志者無昭々之明とあり物徂徠か
讀荀子に明は名の字の誤なりとして何様
名の字になすまては甚穏なるゆゑ世俗の人明
名通用すべき例を儒家は古昔に索めてる
を徴證となし夫故方氏刪定謝氏箋

釈、桃氏遺、東、家氏新、朝氏述、楮氏攷、久氏増注なとふりしを、徴を載す、これらは悉く素霊を読さる所なり、素問天元紀篇に、君火以明、相火以位とあるを、其処に唐の王冰か次注に、故曰君火以名と直に名の字に改めて解しあられは、是明と名と通用する明徴なり、これらは儒経に徴なく、素霊にあまれは、実に金匱玉版ともいふへき、珍

是れ古書なるなり、儒者豈読ますして可ならんや、

漢蘭酒話巻之上 終

漢蘭酒話巻之中

學半樓主人　著

某氏又問曰、醫書を讀て、儒經の文字訓詁を發明しまへる所は聞命矣、文字訓詁の外、儒經の義理、醫書に就て發明しける事何々や、可得聞乎といはれし時、余答ていはく、儒經の義理、醫書に能く發明しける事あまたあり、只史のことわざに曰、人の常に云なる事、醫書にて發明せしこともありけり、孟子の

人有恒言皆曰天下国家天下之本在国々之本在家々之本在身といへる人の常云恒語にあれと皆聡明の聖賢教へ玉ひしことなれは中々は至妙の言にして能く聖訓に合することにてあきらかなるものなりさて人の常語に嘔吐することをへどといふ辞ありこれを醫書に所謂變吐の字の音を縮めることなりて古人字書を作られし變字に吐なり嘔なりとの訓詁傳へされしは諸醫書等に能く攷證するに變は又吐の義となれり千金方云吐變不得下食灸胸堂百壯とありこれは變吐の字を倒語に用ゐし吐變と謂ることの例なり外臺秘要南海寄帰傳にみえし周裴汝南先賢傳涅槃経等には皆變吐とし謂なり外臺秘要載下救急療胃蒸傳屍方云如變吐困不須起又載崔氏温白丸方條云黄疸宿食朝起嘔變此嘔變は又變吐と同義

剔ハ骨を解事にて俗にこそひたくあすることゝ

あり、南海寄帰傳云、若疑腹有宿食、又刺臍胸、宜須恣飲熱湯、指剔喉中、變吐令盡とあり、

周裴汝南先賢傳云、蔡順字君仲、有至孝之心、少喪父、奉養母、甘口之物、不敢先嘗、母至婚家、因飲酒變吐、順恐中毒、乃嘗其吐とあり、

又涅槃経壽命品云、譬如飢人、終無變吐とあるに據れは、俗云のへどといふことは變吐の義なる事明らかなり、又嘔吐するを偏に變といひたる事、

疊用ハかさね用ゐて

本草綱目にみえたるは、變は即吐の字の義なることを知るへし、變吐、吐變、嘔變、といふは、下利疼痛なとの例にて、同義の文字をも疊用せしものなり、

本草綱目人参條云、變酸水といへる變の字は、即吐の字の義に用いたるなり、さて又變の字を吐の字の義に用ゆるは、先秦以上の言とみえたり、

靈樞五味論篇に、苦走骨、多食之、令人變嘔、

又黄帝曰、苦走骨、多食之、令人變嘔、何也、少俞

曰苦入於胃五穀之氣皆不能勝苦苦入下脘三焦之道皆閉而不通故變吐となり是て変の字吐の字の義に用いたる權輿なり又俗に云ふ身骨のおれざる事をらく〳〵といふは樂の字なるべし然しからば樂と心身には逸といふべきか なれども身體の安逸をさして樂といふ様は本國の言に似たれども靈樞九鍼論篇に形樂志苦病生於脉形苦志樂病生於筋形樂志樂病生於肉とあれは形體の安逸なる事を樂といふなり古云ふらんもあり又世俗汚を惡む事あれは唾してやましくおもひ好む事あれは涎を流すといふは常俗語なり然る本邦の世俗のことわざにも中華の人にたかはさるなり後漢の王充論衡に盗跖死人唾其頭腦と有唐の杜甫飲中八仙歌に道逢麴車口流涎と有り唾其頭腦は悪をあらはしてなり口流涎は思ひ

麴にて酒を造ることゆゑ上戸の麴車にゆきあへは酒をおもひ出して呑たくなりて口より涎を流すといふなり

好ミしことなれは也

吻合の説上巻
にあり

本邦の俗云と吻合符同するなり然し唾も涎もお

なしく口よりいつるものなれとも腎より出るものは唾し

脾より好むものは涎いつるなりしかし所以を知る事

難かりしに余素靈を読てはしめて其所以を

知りぬ素問陰陽應象大論篇に腎藏在

志為恐（王氷次注恐所以懼悪也）脾藏在志為思とあり又

靈樞九鍼論篇に腎主唾脾主涎とあり人

天機とは天然
自然のからくり
のこと
活潑とは活てうごくことなり

およそ人恐るゝものを見聞すれは腎恐の天機活潑

して口に唾を生し然るに好むものを聞見すれは

脾思の天機活潑して口に涎を生するものなり

しかるにこれ得すして俗云も深くつく所ありて

採るべきことなれは足るべきなり中庸に舜好察邇

言とあるもこれなるべしさて又世俗

ことわさは何の説よりも視るにたらさる事

ある事ありとて辞をいましめよく聖人の旨に叶ひ

たる事と見えたり。蓋し人の形體と虚體なることの
まで何ほど思慮を苦しむとも、これまではたらきまじく
ことなきことの変化とも只形體の命をもなく思慮工
夫を思ひて魂といふことのは一箇の精気なれば強
弱増減のありけれ。形の思慮の丈を用ひれば長き挫む
そのたりし丈者俗云ふ魂気弱魂気盡ぬといふ辞
何なり。魂魄強といふ文を左傳昭七年にみえたり。
さて魂といふことのは靈樞本神論篇に随神往
来謂之魂と何きは魂は形體の使となりて或は
知覺し或は思慮する是物の精気を謂なるよ
るべし。これはまて俗の云合にけしふを知べし。さてまた
醫者などの流るゝ儒理の義説を參酌せし事を擧
まては大學に人之視己如見其肺肝と云ふ語を
世儒の大學を説くを聞くに如見其肺肝とは
すなはち人の藏府を見るごとく胸中の事を他人
より明らかに知り又按ずるに大學に説なるなり。果して

本経のことなれは如見其藏府とも如見其心と
いつれも意をもちゆへきなり何となれは五藏中の
肺と肝とを特に挙られたるや夫には必主意
ある事なるへしかれとも強ていふときは気を詳に説る
人なし余昔此事を疑しくおもひしめて一生を気をつけ詳
解してをもひし古人の云ところは苟（不苟）しかるへきの
なりと欲しおり素問六節藏象論篇に肺者気
之本魄之處也肝者罷極之本魂之處也とある

靈樞九鍼篇には肺藏魄肝藏魂とのたまへり
肺肝の二藏は人の魂魄を蓄ふる府なり如見其肺
肝とは猶如見其魂魄といふことなりかくのこと
く解し得れは大學の意義至極明らかにして
但大學には云をしるさゝるものなれとも関尹子には
亦魂藏肝魄藏肺とあり韓詩外傳には肝藏魂
肺藏魄とあるも皆素問を本つきしものなり実に
至要の妙語なるへし又尚書盤庚下篇に今予

其敷心腹腎腸歴告爾百姓于朕志とあるを
語あり孔安国伝には布心腹言輸誠於百官
以告志とのミ注釈して腎腸二字はなきと同
様に解したり其後の諸注家の説にも此に五蔵
中の心蔵と腎蔵とを特に挙てのみありし意義
を詳に解せし説なきなり余霊枢を読みて始
めて此義を詳に解し得たり蓋し此義は腹内諸
蔵府の主たることのなきが故腹字を帯しめて心腹
とのみありしことなり腎蔵と腸府と同所にある蔵
ゆゑ腸字を帯しめて腎腸とのみありしことなりさて
心蔵腎蔵を特に挙げありしことは心蔵は人の
神明の宿る所なれば本なり五蔵の最も尊く腎蔵は人の
精志を蔵することなれば心と共に挙げしことな
なり霊枢九鍼論篇に腎蔵精志とあるを考へ
て知るべし總じて人の思慮精粋なり技能の精巧
までも皆腎蔵の主る所なればこそ素問霊蘭秘典

論篇に賢者作強之官伎巧出焉とあるに
なりたるときは盤庚の予敷心腹腎腸と
ありしハ予神明精志を布て告ることのなり云々之
かくのごとく解せは心腹腎腸の語は意義深く至
極ありしかるに實にしかなり總して古人の立言は漫
然たる事なきものなり又孟子梁惠王下篇に
擧疾首蹙頞而相告曰云々とのたまふ語あり
許愼説文に頞鼻莖也（朱熹頞を額字にて解せしはあやまりなり）

蹙ハ愁ふる皃頞ハ両眉の
あひの事俗にいふみけん
に当る両眉の
あひしかめつめたる事なり
顰ハ眉をしかむ
める事なり

しかるときは両眉のあひだ頞よりはなれ蹙頞ハ即顰
眉する事なりされは人のいやなる事を聞見ては
まつは疾首すれは頭を天谷と名けて神明の
舍するところなれは神明いやなる事を聞見ては
おもふ時は頭痛するやうなりて終に蹙頞して
眉を顰すれは何の所以なるやらん離きなりしか
靈樞を讀てはしめてその所以を解し得たり人の
両眉の間を闕といふなつくる精魄の顔色に顯るる

所あり、去れは其鼻に沿つき而して、神魂の顔色に
形あること所あり、夫ゆゑに、古人病者の顔色を伺ふ
には、鼻を明堂と名つけ、兩眉の中を闕と名つけ、
額を庭と名つけて、明堂闕庭を診察簡要の
所とすることなり、人身のいやまさりておこるを耳目をもつては、
精魄神魂縮りして、其氣顔面にあらはれたる魂
魄通徹せる所の眉間鼻莖の皮肉、自然顰（ヒン）
蹙（シウ）するところなり、靈樞五色篇に明堂者鼻也、
闕者眉間也、庭者顔也と宣へり、又闕中者肺也、
直下者肝也と宣へり、是眉間の闕は肺神の顯る
所なるに、其下の鼻莖は肝神の形ある所なるによつ
て、義めて肺肝の二藏とも所に偏なしにして、魂魄を
藏するところなれは、眉間と肺魄の形あるところ、鼻
莖は肝魂の形あるところなれは、疾首蹙頞の義理、
分明に解しはからるなり、又離婁上篇に存乎人
者莫良於眸子、眸子不能掩其悪、胸中正則

眸子瞭焉、胸中不正則眸子眊焉と云文あり、
注解なけれは蓋人與物接之時、其神在目とて
説きみたれとも、何故にて人の神明は在目とする所
以を不説ゆゑ其意義分りたるに似て未分明なり、
靈樞大惑論篇を按に岐伯曰、五藏六府之
精氣、皆上注於目、而為之精、々之窠為眼、骨
之精為瞳子、筋之精為黒眼、血之精為絡、其
窠氣之精為白眼、肌肉之精為約束、裹擷筋

裹纈ハつゝみかゝへて何めくし
擷ハ纈の字の誤なるへし

骨血氣之精、而與脉並為系、上屬於腦、後出於
項中、又のたまふに、目者五藏六府之精也、營
衛魂魄之所常營也、神氣之所生也、故神勞則
魂魄散、志意乱、是故瞳子黒眼法於陰、白眼
赤脉法於陽也、故陰陽合傳而精明也、目者
心使也、心者神之舎也、故神精乱而不轉、卒然
見非常處、精神魂魄散不相得、故曰惑也（曰字
誤）惑目と云へるに至て孟子の存乎人者、莫良於眸

子ニよのなくし所以の意義明了ニ解し得らるゝなり左傳昭七年鄭子産曰人生始化曰魄既生魄陽曰魂用物精多則魂魄強是以有精爽至於神明杜預注云魄形也陽神氣也孔頴達正義云人稟五常以生感陰陽以靈有身體之質名之曰形有嘘吸之動謂之為氣々形合而為用知力以此而強故得成為人也其初人之生也始變化為形々之靈者名之曰魄也既生魄矣魄内自有陽氣々之神者名之曰魂也魂魄神異之名附形之異為魄附氣之神為魂也附形之靈者謂初生之時耳目心識手足運動啼呼為聲此則魄之靈也附氣之神者謂精神性識漸有所知此則附氣之神也と解し來てるこのし杜氏孔氏何を徴證としてかく說きたるにや古昔に徴據なくしは杜撰の說となるべきなり章は異樞に精神魂魄の解委しく說きあれし[illegible]ハこゝまし

杜氏孔氏の本傳に亦あるを見えたり、靈樞本神篇、

天之在我者德也、地之在我者氣也、德流氣薄而

生者也、故生之来謂之精、両精相搏謂之神、隨

神往來者謂之魂、並精而出入者謂之魄、所以

任（任子華子北宮意問篇作格、似是格量也、）物者謂之心、心有所憶謂之意、

意々之所存謂之志、因志而存變謂之思、因思

而遠慕謂之慮、因慮而處物謂之智と説き玉

あまりふかくはこえて精神魂魄を説し事ハ他經にまれて

さるから醫書ハ儒經の羽翼ともいふへき醫經の古書

なりけりさて又論語季氏篇、孔子曰、見善如

邢昺ハ論語の疏を著述し人なり

不及、見不善如探湯とありて探湯の字を邢昺（ケイヘイ）

疏には人之探試熱湯、其去之必速、以喩見悪

事去之疾也と説けり、朱熹集注には注解な

けれは多く張邢疏のことく解しけるよしなれとも然る

に清の毛奇齡論語稽求編といふ書を著して

排斥ハおしやりしりぞくることゝ
排ハ推之斥ハ
黜之ト字書ニ
見えたり

邢疏の説を排斥せり、其説にいはく、范甯對王恭曰

臣聞仲尼之言見善如不及見悪如探湯此易不
善字為悪字且注云探湯喩去疾也按扁鵲
傳湯液醪醴所以治疾者故以探湯去疾為
却悪之喩と注ししは従ひつべきものなるを
此を往々毛説を本とする人何れも霊枢を顧ざれは
実に無稽の妄説なり霊枢九鍼十二原篇に
刺諸熱者如以手探湯刺寒清者如人不欲行
とあるの語なりこれ探湯の字は如何にも湯液をと
ゝのふる事に解すべきや以手探湯とは手を以て熱湯を
探り試る義なる事明なり若霊枢なくんば邪疏の正
説を毛氏の妄説に実作く聖経の旨を謬べきを
幸に霊枢有りて邪疏の寃を雪き論語の義経も
始て定まり追しるにあらずや或る毛氏を信仰する
人の語りしには霊枢書なりしとは疑くは漢人の依託也
漢末の偽書にして訓詁なとの徴據とは成難しといへ
る余か言を破したり余聞く又列子なとも引證ましくて

旲極と先秦以前の古暦にて訓詁も正しく慥なる暦なる事に通じ又列子湯問篇曰日初出滄々涼々及其日中如探湯此不為近者熱而遠者涼乎とありこれ探湯の字ハ旲極の意と吻合符同すとはか列子亦漢末の偽書なるを及其日中如探湯の字は何ほと牽強に解するも豈湯液を用ゆるの義に解きえんやこれハ吾人疑ひして居たり可謂愉快なり又左傳荘三十二年曰初公築臺臨黨氏見孟任従之閟而以夫人言許之割臂盟公とある割臂ハ何なる事か詳しく盟をなす事なるやその事分明ならざりしを讀左傳人謂らくつる本邦の世俗男女情好の誓をなすにも臂に文字を刺む即ちこれ事なるべしと何さ満ニ此説を為せりまことにさもありなん列子湯問篇にも刻臂以誓といふ語ありてもこれまでハ此事分り難きなりしを旲極禁服篇曰黄帝曰善乎哉問也此先師之所禁

魯の荘公といふ人ありし時臺を築く黨氏を臨みて孟任といふ女を見んとて是を追つめしに孟任の君の思ひに従はざるを閟といひしなり

坐私傳之也割臂歃血之盟也云々黄帝乃與倶
入齊室割臂歃血黄帝親祝曰今日正陽歃血傳
方有敢背此言者反受其殃とあり上文にては割臂歃
血といひ下文の祝言にては偏に歃血傳方といへれは
割臂歃血ハ一事なり總して盟には牛羊鶏豚の
血を歃て盟ふこともあれともおのか臂を割てもその血牛羊鶏
豚の血のかはりとして歃り盟ふてありける事に見
えたり大傳の義明に解たりまさし孟子公孫

丑下篇ニ客不悦曰弟子齊宿而後言夫子臥而
不聽請勿復敢見矣集注ニ齊宿齋戒越宿也
とあれは蓋し前日より齋戒して一夜を經ると
いふ義に朱熹ハ解せしなれとも此說ハ甚義に
てちかひたれとも劉向新序雜事篇ニ齊宿三日
と說ありて服の二日といへるは宿ハ一夜の事にては解し
かたきにより独庵溲勃よりの書に齊宿齋肅也古
人宿肅通用すと說るにこれハ朱注に從へは

新序なとに合し穿きたる説を作せしなれはなり然し劉向は前漢の末の人なれは齋宿字の訓詁を誤りしなるへからすと朱学者流無理に言訳すれは先秦以上の書に强く齋宿三日といふ如き文なれは朱注の誤を咎めしきなり然るに霊枢にも又齋宿三日といへる語ありてこれは独庵の説を正しくして朱熹の注を謬なる事明なり霊枢禁服篇に雷公再拜而起曰請聞命於是也乃齋宿三日而請と定る文あれは先秦以上の書に慥なる證拠ありて孟子の義理始めて定るといふへし先賢此説を皆儒経の言醫経を以て正義となしめて明らかなれは儒家の鑿昏を諭さるゝ人ふかきることをもて知るへし

○某氏又問ていはく営気此説にて血は動静の二脉を循流する赤色の液にて一身の営養に資他の諸液は皆是よりいつるものなり本氣糜（ヒ）より

こゝに化生せしものにして、生身養育第一の用を
なすものなり、さて乳糜といふものハ、飲食消化して
なる純白精粹の液なり、其液腸胃より心肺の間
を経て、動脉に流注するに、漸く化して血となる
ことのあらましを説けり、こゝまでは漢蘭の醫生は同守する所、
漢土は成説なきことなれバ、只孟浪の答をぞ發せ
るのみにて、古人の定論をもて答ふる人なし、先生ハ
別に説ありしや、余答ていはく、夫血ハ一身中の
大切なるものなれバ、元来の成説如何を漢の神聖
説玉はさりしや、今の漢醫詳に不答は、全く学
問の祖なる故なり、さて血の成る本と揚所をもて論する説
は、漢の神聖説きたまへる所に、蘭家の説と同じきなり、
但血の用をも論ずるに至るは、蘭説ぞ漢説に勝
れり、一派祖称なる事あり、請ふ先是を弁せん、夫胃ハ
水穀の府にて、其上口は上焦といへる部、上焦ハ胃の
水穀の汁を霧のごとくに上部に發散し、一身の潤

液を化する也中口より中焦へ出る所中焦より胃の五穀の汁を遍のこらずに肺蔵に流注し肺の鼓動を得て血となる也下口より下焦へ出る所下焦より胃の五穀の汁を雨のこらずに下部に降し尿汁尿水となすとのなり故に岐黄の言に上焦若霧中焦若漚下焦若雨と宣へり素問霊蘭秘典論篇におゐて霊樞本輸篇三焦者決瀆之官也水道出焉とあるは即ちこの義なりさて又肺蔵より

（泌ハ漉し流すの義なり）

也来し血液と又心蔵に運化し心蔵より一身の経脈に流して遍周不至所なきのやうにせしむることとなし霊樞栄衛生會篇に黄帝問曰願聞中焦之所出岐伯曰中焦亦並胃中出上焦之後此所受氣者泌糟粕蒸津液化其精微上注於肺脉乃化而為血以奉生身莫貴於此故独得行於經隧命曰營氣と宣ひまた素問五藏生成篇に心之合脉也とのたまひ又諸血者皆屬於心とのたまへ

まて神聖の成説唯〻のなることてはし、さて血液の用を論するに至りては蘭説にては血は一身の養ひとなりて資り、津液二至るまでのこと説く、神明の運行もしかるは血液第一の用なりと説く。予前篇に論せしごとく、人の神を譬言ては火のごとし、火ハ薪ニ炭へ何となれば是は独存する事能はざることなり。神明も人身中の血液に乗せられねハ独行しかたきことなり。夫ゆゑ一身の中血液流通する所に神明ゆきさるはなく、血液流通せさる所に神明ゆく事なきことの證ハ薄皮爪毛のたぐひ血液流通せさる所ハ痛痒寒熱をおぼえず。それに神明ゆきさる所なれはなり。此血液流通する所ハ神明ゆきさる所なきゆゑ、少しの所にても悉く痛痒寒熱をおぼゆるなり。されバ神明ハ血液を待て運行することなれバ、能々心得へし。故ニ素問八正神明論ニ血気者人之神也不レ可レ不ニ謹養一。又霊枢営衛生会篇ニ血者神気也とのたまへり。まて神聖の説の精密なる事

あるべし、

（滷ハ鹹滷とて うみにてしほはゆき 気味あるをいふ）

○某氏又問曰漢家にて一身の滋潤する清液を津液
といふの名をとなへられしを蘭家にてハ水液と滷といふ
これハ二つあれども其質清稀にして水のごとくなる
周身を滋潤するを主とするものなれば水液と名づけ鹹気の液

（分泌ハ分けて 漉し流すなり）

血内より分泌し出して汗孔より汗となりて漏泄する
ものを滷と名づく漢家にては津液と一つに名づけたるは
詳ならざるに似たり先生いかにと思ひ玉ふや余答曰要是
何言也漢の神聖津液と名づけ玉ひしハ津と液とは
二物なり胃の三焦より飲食の精液を流し肌肉を
温め皮膚に充ち腠理を沾し玄府を固めて其
餘ハ汗となりて外に發泄するものを津と名づくなり
淡泊なるものをいふなり又一つなる液の濃厚なるにして骨髄
に注し脳髄を養ふものなれば液と名づく其液なるもの
ゆくなり是故津は常に流行し液は常に一處に
沈着して行かざるものなり二者をあはせては腠理に在て

汗漏不止悪風煩躁するゆゑ津の脱して腠理を固むる蔵を失ひしより發こるところなり又骨節急牽屈伸不利恍惚心乱皮膚甲錯のゆゑ液の脱して滋潤の蔵を失ひしより發こるところなり而潤澤の力強きところのものは萬物にありて鹹氣に若くはなし總して身体潤沢の液も皆鹹氣なくしては潤沢すまじき者なれは津も液も本皆五穀と鹹味と和合して醸したるところなり但ニ其尊きところのものは津となりて鹹味を離れずして尊きところのものは液となりて精粹よりて鹹味を離るゆゑしかも用ひて皆潤沢するを主るところのなり然るに營なりそは津を水液と酒とのことくに例ふ大切の骨髄に注き脳髄を益して液としてのち諸液の中に混らさるは反て陳くしてあしさて又神靈津液をも論して至みたるを尊くされは靈樞決氣篇に黄帝曰余聞人有二精氣津液血脈一余意以為二一氣一耳今乃辨為二六名一余不レ知其所二以然一岐伯曰兩神相搏合而成レ形常

先身生是謂精何謂氣岐伯曰上焦開發宣五穀味
熏膚充身沢毛若霧露之溉是謂気何謂津岐伯
曰腠理發泄汗出溱々是謂津何謂液岐伯曰穀入気
滿淖沢注於骨々屬屈伸洩沢補益腦髓皮膚
潤沢是謂液何謂血岐伯曰中焦受気取汁變
化而赤是謂血何謂脉岐伯曰壅遏營気令無所
避是謂脉黄帝曰六氣者有餘不足気之多少
腦髓之虚實血脉之清濁何以知之岐伯曰精脱
者耳聾気脱者目不明津脱者腠理開汗大泄
液脱者骨屬屈伸不利色夭腦髓消脛痠耳
數鳴又五癃津液別論篇曰三焦出気以温肌
肉充皮膚為其津其流而不行者為液よのれ
ましはこれをもて津液の理明かなるへし

○某氏又問曰ある營気霍乱病を論して或ハ炎暑
の時血液鬱滞して變壊刺戟するものあり或ハ
飲食ニ傷られて因り或ハ腐敗毒にあたるものあり

發して又纖維の感動しやすくなりて不吐不下して
劇き腹痛を兼ることあれは乾霍乱と名く いつれも
皆腸胃攪擾の運動なりと説り 然るに漢醫は
霍乱は長夏炎熱の暑邪のために傷るゝと見えたり
然し霍乱は四時にあることなれは暑邪のために
傷るゝのみにあらす 然れは蘭家の説真にして
漢家の説は妄なるへし 先生如何と問ふ 余答
曰 今の漢醫の霍乱は暑邪のために傷るゝと見な
しは全く学問の疎なる故なり 余従古神聖の霍乱
を論し玉ふ所を稽攷せるに悉く蘭説と吻合符
同せり 但蘭説によらされは甚詳其也と請ふ徴なる
挙て論せん さて先つ霍乱の名義を論すれは霍は
癨字の省文なり 玉篇をはしめ字書にも癨病乱なり
とあり 霍乱とは二字同義の文字を並用ひたる
ことなり 疼痛煩悶の例と同し 病にして腸胃擾
乱るゝといふ義にて霍乱と名つけたることなり 成無

已ハ揮霍繚乱と従して倏忽の間に吐下するをいふ
義に解したり此説古經に合せて方有執も
廣韻といへる字書に據りて霍吐せしと説たるの
説也又古經に合せて其他霍と同じからずと説
霍ハ臛字に通用すといふ説のごときは誤に特
務な擅さるものなり素問気交變大論篇に民
病飧泄霍乱といふ文あり又六元正紀大論にも
嘔吐霍乱飲發注下といふ文あり同篇に身熱
吐下霍乱といふ文あり王充論衡四諱篇にも
霍乱嘔下といふ文あり舊説のごとく霍乱ハ吐下
の名なれば嘔吐飧泄吐下嘔下の字は皆蛇足
に属すべし霍乱ハ腸胃擾乱の義なりと余説
をとるべきは靈樞五乱篇に岐伯曰清氣在陰
濁氣在陽営氣順脉衛氣逆行清濁相干乱
於腸胃則為霍乱と見へてこゝに至てそ腸胃擾乱
の義なる事明らかなるべし夫故に古聖霍乱を療し

あつるは腸胃の部位を刺し玉へり素問通評虚實論、霍乱刺俞傍五足陽明及上傍三とあるも俞とは上文の少陰の字を承けたまへは足少陰腎俞なり腎俞の傍ハ大小腸の俞穴なり足陽明ハ胃の俞なり両傍向上第三穴ハ胃倉穴なりこゝまて益腸胃擾乱の義なる事明なりさて又霍乱は土気不正の邪（觸）にして起るものなり土気ハ五季にして四時に旺するといへとも春秋冬の土用よりは長夏炎熱の時なれば。なかく多き所以なり素問六元正紀大論篇に岐伯曰土鬱之發巖谷震驚雷殷気交埃黒昏黄化為白気飄驟高深撃石飛空洪水迺從川流漫衍田牧土佝化気迺敷善為時雨始生始長始成故民病心腹脹腸鳴而為數後甚則心痛脇䐜嘔吐霍乱飲發注下とのたまへし霍乱ハ全く土気不正の邪に觸れて起るものなり又血液鬱滞して變壊刺戟するの因と

別テ旺スルヿ甚キモノ故夏ニハ霍乱病

埃黒昏黄とは
風吹てほこりたち
是暑の空くもりあるを
こといへり

起ることなり霊樞經脉篇に足太陰之別名曰
公孫去本節之後一寸別走陽明其別者入
絡腸胃厥氣上逆則霍亂實則腸中切痛虛
則鼓脹取之所別也とあるハ霍乱を全く脾
藏の血液鬱滞して壊變腸胃に病し霍
乱をなし又実するときハ吐下の天機を絶
せしめ切痛苦悶し虛するときハ吐下の天
機衰弱して鼓脹苦懣すれバ病なり實則
腸中切痛虛則鼓脹とは此世に所云乾霍乱之
さてその病と血液鬱滞より起りたりといふを
本經に取之所別として刺絡して療する
ものハよくつゝしむべし又飲食に傷らるゝもあるなり
金匱禽獸魚蟲禁忌篇驢馬肉合猪肉食
之成霍乱又同篇兎肉著乾姜食之成霍乱
といふもの是なり又腐敗毒にあたるに因りて起る
ことなり素問六元正紀大論篇熱則身熱吐

下霍乱、癰疽瘡瘍、脅鬱注下、瞤瘛腫脹、嘔鼽
衄、頭痛、骨節変、肉痛、血溢、血淋、淋閟之病生矣
とのたまへるは、今云腐敗毒にあたる人、熱気を得或
血液鬱滞の人、熱気にあたりて霍乱となし
病なり、夫ゆへ癰疽瘡瘍血溢血淋なとも並へ
定めしてあるなり、同篇に木鬱発之、土鬱奪
之、金鬱泄之、水鬱折之、然調其気とのたまへり
しは、かの地土運の土鬱して霍乱をおこすものなり

總して土鬱の変なれは、脈も絡をゆるめて為
くは刺絡の治療を主として、このゆゑなること
神聖の霍乱を論し玉ふの詳なる、蘭のみにて
へき如きにあらさるなり、さて傷寒論に載し玉ふの霍
乱は、皆傷寒に類せし暑邪の霍乱のみを挙玉ふ
ことなり、蓋し長沙は南方卑湿の地にて暑邪
霍乱多きをもつての故なるへし
本朝茲之以前の医家は、皆素霊の旨を研究

せしかれとも世は天運の不幸にて吉益為則な
との聖經を読こともなく知らざる但家儒癖き悪
医を世にして傷寒論をおのれかこゝろに任せ削補
改竄して古昔の聖經なりと唱へて世人の
耳目を塗りしより世人傷寒論は熱病書と
霍乱のみ霍乱なりと心得て方今の医に至るまて
も一毒たるを知らで聖經を読耳目聾盲せしむる霍
乱と称する何ものをか知らしめて紅毛蛮夷の小究理

作俑ハ孟子の梁恵王上篇にみえたり其義ハ上巻に小序せり

説に出せらるゝにいたらぬ害なる吉益なれは作俑の
徒にして千歳の戯場となるへし但吉益の学を
方極類聚方を読て事理わからぬ薬徴なとを
知りては医学成就すと定め甚簡便に似たるな

尸祝尊崇とは神をまつることを
言ふ巫かんなきのるい
のまつる神の
崇り禍をさけんかために祈りて福
をもとめんとおもふ是味の
ようなるものなり

当今の医生無学にて安んし其流派を尸祝尊
崇し適霊枢素問を読と古代の聖經なれは
其旨高く其味深くしておのれか力にては咀嚼
しかたく強ておのれにて解し得かたきよりしてあやまるか

こゝらわかりし素人も治療の用にたゝぬ唐人の寐語
なりなとゝ口にすへらし（治療ニスヘラシ）口にまかせて己らつく弟子
なとの無学文盲の徒に物語しく無する事
あきれたる大息すへきことなり太田錦城存生の時
京師に抵遊歴して賀川氏よりも医家に巨なし
たりし時に主人東洞信仰にて一生画賛を太田氏に
教へたまへは東洞ハ狸医者なりしと長文を
作りかく千歳の瘂蝪なる事をしらせやりけるかい
医者なと博く渉りたるといふへきものなれは
流石ハ老年の大儒なれは其活眼畏へきことゝ余は嘆し
に感服せり。

○某氏又問曰瘧瘡初熱の時いまた小疱紅點を
発せさりけるとき他病の熱と無別し易きものにて
夫ゆゑ予て案家察法を五等に別ちて第一ハ
世間一般痘瘡流行するをもて察し第二は
その痘に罹るへき年齢をもて察し第三ハ其人

痘を患者の側にありしみるに以て知るへし第四に
一蔵の中痘の起伏衰旺の時あるやなしやを察し
第五には痘の初発尋常の病と異なる一種の
証病ありやなしや是を察するなり是蘭家痘を
察するの法則なり漢家痘瘡察法はかくのごとく
行届きたるや余笑曰漢家痘瘡を察する法を
五等にわかちたるは頗る密に似たれとも第一よ
り第四までの察法は俗夫の目にて推量すとも
よく知れ若し医にて是らの疾を診する法とはいひか
たきなり第五にては但尋常の病と異なる一種
の証病ありやなしや是を察するものゝことをいへとて
誠に漫然たる故にて察するに難き事なき法則に
いふへきなり痘瘡初熱の時雑病の熱と只見
分ち易きことのなれとも只痘瘡邪の熱とは余
分しかたきことのなり痘瘡は後世の疾なれは
其察法神聖の説になけれとも漢家にては究

（巨擘とは孟子の滕文公下篇にありて其注に大指也とありて衆くの小指の中の大指のあるごとく中にもすくれたる人といふやうのことなり）陵の朱氏其巨擘者なり痘科鍵といふ書を著

して出痘の験をも論しられたり寒由外入痘自

（惨ハ痛ましくうれふることなり）裡出故悪寒無汗頭痛脊強面色惨而不舒

（出気粗ハ鼻の息のあらく呼吸するのをいひて睡中ハ驚く気味あるをいふなり）此傷寒之所有而痘疹之所無両眼含涙鼻出

気粗睡微驚耳紋見悪熱不悪寒此痘症之

所有而傷寒之所無也とありて又論するに初熱時

睡中微惕鼻出気粗斯二者僅可作出痘験

至謂中指独冷耳尻冷等説治痘至老未之

験せずしてこれを論し出痘證察するに逃ていはく

きこえたり尤睡中驚惕ハ甚微かにして候ふ

知り難きことなれ共患者の例にいたさるれと

含めく昼夜共知らしむるには必あることなり

鼻出気粗なるは痘の邪による事あまりあれとも出

痘の気息とは自然に異なる所あることなりとも

治療を施さるゝもの京師の痘科ニ高名なる佐井

聞庵翁ハ老医にして学を余れに受けたまへは

同じく痘科鍵論ずる所を互ひに討論し余痘児ならば朱氏の説を試むるに悉く然らざるはなきなり実に朱氏の論ハ金科玉條の言なれバ方今の漢醫甚察法を用ゆる事を不知人ハ有るゆゑ名栄医の見より疎なる事多し総じて漢学の勇たるものとては蘭人の理ニ似て非精ニ似て疎なる究理の及ふへきにあらざれば足ふも未此察法にて出痘を考ふるに見る事一としても験効なきものゆへさるなり

漢蘭酒話巻之中終